

## 38 『玉機微義』の鍼灸

北江龍也

『玉機微義』は明代初期の医家である劉純(字宗厚)が編纂した医方書である。本書には洪武二十九年(一三九六)の自序があり、これをもって刊行年とされている。父劉叔淵(号橘泉)は朱丹溪の弟子であることから、劉純の医書にはいわゆる李朱医学の影響が色濃く反映している。序文によると本書は、師の馮庭幹に授けられた『医学折衷』一帙を骨子に増補されたものである。『医学折衷』は元末明初の医家、徐彦純(字用誠)の書であるが、もともと一七の病門で構成されていた。劉純はこの書の内容に感銘し、新たに三三病門を加えるも、自らの言を「按」「謹按」と銘記して本文と分かち、徐彦純の原文との区別を明らかにしている。

『玉機微義』の病門は全五〇巻に対応してそれぞれ五〇門に分けられており、第一巻〜七巻、三四巻〜四三巻

までが徐彦純『医学折衷』の部分であり、残り第八巻(三三巻、四四巻〜五〇巻までが劉純が新たに補訂した部分である。五〇門のうち以下の三〇門に鍼灸に関する内容が見られる(数字は巻数)。

1、中風、2、痿證、4、痰飲、8、欬嗽、9、熱、10、火、11、暑、14、寒、15、瘡瘍、17、血證、19、虚損、20、積聚、22、水気、23、脚気、24、諸疔、27、喉痺、28、淋悶、29、眼目、31、腰痛、33、心痛、34、頭痛、36、效逆、39、瘰、40、癘風、41、風痲、42、破傷風、43、損傷、46、霍乱、49、婦人、50、小兒。

このうち灸法に関する条文は計九巻(1、9、19、20、28、34、36、42、46)中に、鍼法に関するのは計六巻(10、11、22、24、39、43)中に、鍼灸二法を用いるのは計一五巻(2、4、8、14、15、17、23、27、29、31、33、40、41、49、50)中に見られた。

ただし具体的な治療則以外の禁則、医案などもここでは鍼灸条文と見たため、実際の治療条文は更に少なくなる。例えば医法書という性格から鍼灸条文を全て抜粋する煩を避けた部分も見られる。巻之一四・寒門では傷寒

の灸穴は『資生経』に詳しいゆえ、ここに載録しないと  
いう旨が書かれている。

さてここで鍼灸法として特徴的な方法を見てみる。巻  
之一五では瘡瘍の切開法も鍼法とみなし、巻之三三・心  
痛の刺法は胸腹中の虫を狙い刺す方法であり、巻之四九  
には産に臨んで横生するものに鍼を刺して転じさせる法  
がある。巻之八・欬嗽に見える舌上の生姜灸は薰蒸法で  
あり、このような例は薬方の補助的手段と思われる。ま  
た刺法においては瀉血法が多く見られる。巻之一五、一  
七、二三、二七、二九、三一、三九、四〇、四三などが  
三稜鍼または鉋鍼（鉋鍼）を用いた出血法である。さらに  
表現に注目すると巻二、四に「燔鍼」が見え、巻一〇に  
「鍼石」、巻一五に「鉋鍼」「砭刺」「刀剪鍼烙」、巻二三に  
「砭刺」「砭惡血」「砭射」、巻二三、三九に「鉋鍼」など  
鍼法に関して古い表現が散見される。

これらの鍼灸法はその素材となった医書に基づく結果  
である。『玉機微義』は引用した書名を比較的多く載せ  
るが、散見である鍼灸の条文は必ずしも出処が明らか  
なものばかりではない。いま検討できた医書を抜粋すれ

ば以下の通りである。

『衛生宝鑑』『儒門事親』『千金要方』『丹溪心法』『丹溪  
手鏡』『傷寒論』『陰證略例』『鍼灸資生経』『医学発明』  
『医星元戎』『東垣試效方』『内外傷弁惑論』『此事難知』  
（披見順）。その他『素問』『鍼経』『諸病源候論』『外台秘  
要方』『脈経』『聖濟総録』『難経』などは引用書名として  
挙がるが、前記の医書もしくは薬方で用いた医書からの  
孫引きである場合が多いので注意が必要である。つまり  
その引用の多くを金元代のいわゆる四大家に由来する書  
に依っているのである。

『玉機微義』の鍼灸を総括すれば、灸法を主体とし、鍼  
法では出血などを多用し、また外科系疾患に多く見られ  
た。

（日本鍼灸研究会）